Lead

All roads lead to the future リード

高知大学
Kochi University

コミュニケーションペーパー
2014 Winter 冬号
¥0 TAKE FREE

〈特集〉

芸術という高みを目指して

洋画、彫刻、工芸美術。創作活動を通じて豊かな個性を育む。

のぞいてみよう高知大学の授業!!
〈海洋生物研究教育施設〉Labo通信
土佐湾ほど豊かな海はない!

まなびの時間
地域に出る!人と話す!それが地理学の第一歩

高知大学のキラ星
弓道日本一・留学生の地域交流

高知大学ニュース

高知大学で開催するイベントをご紹介します。

Event information イベントインフォメーション 2014 Winter 冬号

平成25・26年度 式典のお知らせ

平成25年度高知大学
大学院修了式 学部卒業式
3/24(月)
場所 高知県立県民文化ホール

平成26年度高知大学
大学院・学部入学式
4/3(木)
場所 高知県立県民文化ホール

高知大学 卒業制作展

2/4(火)～2/9(日) 入場無料

教育学部生涯教育課程芸術文化コース(美術)の卒業制作展です。本展覧会は、今年度で第13回をむかえます。
西洋画・日本画・デザイン・彫刻の各専攻分野から卒業生各自の研究テーマに沿って制作された作品が出展されます。ぜひご覧下さい。

時間 9:00～17:00(最終日は16:00まで)
場所 高知県立美術館県民ギャラリー

平成26年度 入試案内

	募集	出願期間	試験日	合格発表	入学手続期間
推薦入試Ⅱ	教育学部学校教育教員養成課程	1/21(火)～24(金)	2/8(土)	2/12(水)	2/13(木)～18(火)
	農学部		2/2(日)		
AO入試Ⅱ	土佐さきがけプログラム(グリーンサイエンス人材育成コース)	1/21(火)～24(金)	2/8(土)	2/12(水)	2/13(木)～18(火)
	土佐さきがけプログラム(生命・環境人材育成コース)	受付終了致しました	2/2(日)		
一般入試 前期日程試験	全学部	1/27(月)～2/5(水)	2/25(火)・26(水)	3/7(金)	3/8(土)～15(土)
一般入試 後期日程試験	全学部(医学部医学科を除く)	1/27(月)～2/5(水)	3/12(水)	3/23(日)	3/24(月)～27(木)

・入試に関するお問い合わせ先(ご意見・ご質問にお応えします。)
学務部入試課 TEL.088-844-8153
E-mail nys-web@kochi-u.ac.jp
・入試に関する最新情報(随時更新中)
http://www.kochi-u.ac.jp/nyusi/index.html

大学案内・選抜要項等の資料をパソコン・携帯電話からテレメール請求できます。
インターネットの場合(携帯電話・パソコン) http://telemail.jp
※携帯電話・パソコンとも共有アドレスです。(iモード・EZweb・Yahoo!ケータイ)
※スマートフォンでのアクセスも可能です。

高知大学の最新情報を伝えたい
THE こうち ユニバーシティCLUB

FM 高知 81.6MHz
毎週日曜日放送中 9:30～9:55
高知大学のHPから過去放送分も視聴できます!
http://www.kochi-u.ac.jp/outline/kouhou/radio_fmkochi/

高知大学の教育、研究、地域貢献等のホットな情報をお届けします。ぜひ、お聴き下さい。
●スポンサー企業
高知銀行／放送大学／弘文印刷／アークエステート

お問い合わせ先 皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

国立大学法人
高知大学
Kochi University
広報戦略室
高知大学 検索
http://www.kochi-u.ac.jp/

TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033
〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail:kh13@kochi-u.ac.jp

メルマガやってます!
月2回配信(第2・4金曜日)

高知大学からメールマガジンを配信しています。大学の「入試情報」から「あれこれ(これは面白い)」まで!!
▼登録はこちら
http://daigakujc.jp/kochi-u

芸術という高みを目指して

さまざまな芸術を生み出す拠点。それも、高知大学の持つ顔のひとつです。そこで、美術界で活躍する3人の先生に自らの創作の流儀について伺いました。

第45回日展（2013）
第4科 工芸美術「たおやかな」

高知大学名誉教授
放送大学高知学習センター 所長

石川 充宏（いしかわ みつひろ）

東京芸術大学卒業、東京芸術大学大学院美術研究科修了（鍛金）、芸術学修士。昭和61年、高知大学に着任。平成20年より放送大学学習センター所長。日展（評議員）。「学生と一緒に作品を作っていると、金属をたたく音がうるさくって（笑）。私の音はたえなる調べだけどね」

思いを作品にこめる創作活動

石川充宏先生は工芸の鍛金、阿部鉄太郎先生は彫刻、土井原崇浩先生は洋画と、異なるジャンルで活動されています。制作のテーマを教えてください。

●**石川**／私は現代工芸のジャンルに属し、今の生活空間にあった造形を心がけています。実際には鍛金という技法を駆使して、金属の板や棒を叩いて成形します。固い、冷たいというイメージを持たれがちな金属を、やわらかく温かな感じにしたいと思っています。そのため、現在のようなトルソー（人体）表現にいたりました。

●**阿部**／一貫して、具象的な女性の形を表現してきました。女性の人体こそ、美しさが集約されたものだと思っています。美しいものを、いかに美の形として表現していくかということを、粘土（彫刻）を通して研究しています。

●**土井原**／「眠り」と「死」が長年のテーマです。じつは学生の時に死にかけたことがありまして、その臨死体験から、死や眠りに興味を持つようになりました。以来、死を見つめるという方向で人体をモチーフに表現してきました。

学生の存在が芸術心を刺激する

大学は、作品を作る環境としてはどうですか？

●**石川**／学生の指導や研究などもやらなければならず、制作に専念というわけにはいきません。しかし、学生に教えるというのは、すごく自分のためになる。学生に伝えるためには自分の中で咀嚼して、言葉にしたり、表現したりしなければいけませんから。また、学生とともに作品を制作することで、私の創作過程を学生が見て、自分なりの表現方法を考えてもらえると、教育者としても造形家としても良いのではないかと思います。

●**阿部**／私も自分の仕事を学生に見せています。そこで、学生は思い思いに感想を言ってきます。作品展に出品する前の、いわば第一番目のギャラリーなわけです。学生の感想を得ることで、独りよがりの思いにならず、作品に向かえることはありがたいですね。

●**土井原**／私も制作途中を学生に見せて、意見をもらいます。学生とは、お互いに感想を言い合える環境を築きたいと思っています。お互いに言い合えるのが、教員と学生の一番いい関係ではないでしょうか。

芸術が持つチカラとは

大きな質問ですが、芸術とはなんですか。

●**石川**／いわゆる昔からの鍛金の技術、技法を使っていますが、表現するのは自分。私の世界、私の形だと思っています。だからアートとは、新しい自分を表現する、自分の内的なものを外に出すということ。そして、作ってしまえば、次に向かっていきたい。そうでなければいけない。いつも、同じものを作っていてはだめなんです。

●**阿部**／私にとって芸術性というのは、エピソードに近いのですが、人の心に共鳴することだと思います。私の作品をある福祉施設に置かせていただいたのですが、あまりリハビリに熱心ではなかった入所者が、作品を触るために歩いてくると聞きました。芸術というと、学問的なイメージが独り歩きしがちですが、より身近な芸術性というものがあるのではないかと思います。

●**土井原**／個展に来られた末期がんの方から「癒された」という手紙をいただきました。作品にはそういう力があるのだと実感しました。芸術とは、時間や空間を超えて人々に感動を与えるものだと思います。できたら自分も、そういうものを生み出せれば、と思います。

先生方はそれぞれ、日展で活躍されています。日展をどのように位置づけていますか？

●**土井原**／出品を始めたきっかけは、多くの人に見ていただけるからです。日展は全国を巡回するので約40万人の人が見ますから。19年前に初めての出品で特選を取って以降、出品は続けていましたが特選からは遠ざかっていました。私の作風が、日展で受けるようなものではないのだと思います。それは納得しているのですが、一方で2回目の特選は取っておきたいという思いも募ってきました。それが、今回の特選につながりました。

●**阿部**／学びの場のひとつです。日展の彫刻部門の特徴として、具象的な人体をモチーフにしたアカデミックなものを高水準に研究、評価する団体はおそらく日展しかないのではないでしょうか。そのような場で作品を評価や指摘、鑑査され、互いに切磋琢磨する中で、それぞれが高め合える場だと思います。

●**石川**／まず、発表の場ですよね。毎年、秋は日展に向けて大きな作品を作っているので、目標というよりも習慣。また、我々大学の教員にとっては、日展に出品することは論文発表と同等に扱われ、業績になります。個展は審査がないので、評価されにくいのです。日展は、日本で最も大きな公募展ですから、注目もされるし、問題があれば叩かれやすい。ただ、我々も「悪いところは悪い」と声をあげ、正していかなければいけないと思います。

特集

芸術という高みを目指して

第45回日展（2013）
第2科 洋画 特選「鼬（てん）を抱く女性」

第45回日展（2013）
第3科 彫刻
「黒潮〜久礼浜にて〜」

教育研究部
人文社会科学系
教育学部門 教授

土井原 崇浩（どいはら たかひろ）

東京芸術大学卒業、東京芸術大学大学院美術研究科修了、芸術学修士。平成18年、高知大学に着任。平成6年、日展初出品、特選。平成25年特選。「作品制作中の楽しさや苦しさは、登山にも似ていると思います」

教育研究部 人文社会科学系
教育学部門 講師

阿部 鉄太郎（あべ てつたろう）

岡山大学卒業。岡山大学大学院修了、教育学修士。平成21年に高知大学へ着任。平成20年、23年、日展特選。「学生に対して、何かちょっとしたライバル心が生まれることもあるんですよ。それも制作のいい刺激になります」

「日展」とは

日本美術展覧会の略称で日本最大の公募展。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書の5科で構成されており、第45回日展（平成25年）では応募総数が5科合計で13,919点となった。

国立新美術館

芸術が豊かにする個性

日々、キャンバスに向かう学生たち 芸術と対峙することで豊かな個性が磨かれる。

花開く個性を大切に指導

幾重にも林立するキャンバス。立ち込める油絵の具の匂い。一心不乱に絵筆を動かす学生、あるいは座り込んでキャンバスを見つめる学生たち―。高知大学西洋画室。ここで、教育学部生涯教育課程芸術文化コースの学生と大学院生9名が、西洋画の作品制作に取り組んでいます。芸術家や芸術文化に関する指導者を養成する芸文（芸術文化）コースですが、正解のない感性の世界といわれる美術の分野で、一体どのように指導が行われているのでしょうか。

巨匠たちが使っていたのは没食子（もつしょくし）インクといわれる特殊なインク。600年以上も消えないとされています。

「授業でも同じものを使いたかったのですが、非常に高価なので、とても使えない。そこで、自分で作ろうと思ったんです。インクの原料になるのは、ある種の極小のハチが木に卵を産みつけることによってできるタンニン含有量の多い虫こぶを求めて、何度も野山を探しまわりました」

インクに加えて、羽ペンも独特の筆記用具。これらを使うと、学生たちはどのようなことが学べるのでしょう。

「羽ペンで模写すると、巨匠たちが絵を描いていた時の息づかいがわかります」

羽ペンは、太い線を描くならば息を吐き、細い線ならば息を吸い、一定の線を描く時は息を止めなければ描けない、と土井原先生。そっくりに模写するために、呼吸も巨匠たちと同じようになるそうです。

「名画を模写するということは、ハイレベルな技術が学べるし、巨匠の感情表現も感じることができます。オリジナルの素描プラス模写をすることで、画力は飛躍的に伸びます」

このような授業をやっている教員は、実は全国でも土井原先生だけ。高知大学の学生たちは、貴重な学びを受けているのです。

教育研究部
人文社会科学系
教育学部門 教授
土井原（どいはら） 崇浩（たかひろ）

「確かに、芸術を教えることは難しい。まず、1人ひとりの個性を大切にすることが重要です。テストで100点を取ればいいという方向ではなくて、個性が花開くような指導をしたいと思っています」と土井原先生は話します。

その一方で、いい作品を描く前提となる基礎も大切だといいます。例えば、鉛筆や木炭などを使って濃淡のみで対象物を描くデッサンでは、構図、陰影、質感、重みなどが重要になるとか。それらがベースとなった上で、さらに感情表現を加えることが人に感銘を与える作品につながるそうです。

技術を磨くと同時に、表現したいものには積極的に取り組んでいってほしい、と力を込める土井原先生。時代とともに、多方面に広がりを見せるアートの世界。それに敏感になり、影響を受けるのも当たり前だと言い切ります。

「絵画の世界、表現の世界は今、何でもありなんです。ぼく自身、学生の頃はすごくリアルな死んだナマズを立体で制作したりと、いろいろとやってきました。学生たちも自由に、自分の表現世界を広げていってほしいですね」

巨匠の息づかいを感じられる授業

西洋画を学ぶ学生は4年生になると、土井原先生によるとてもユニークな授業を受けることができます。ルネッサンス期の巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロらが使用したインクと羽ペンを使って、名作のデッサンを模写するというものです。

「巨匠たちが使ったような素材でデッサンを描きたい、と私自身が思ったのがきっかけです。授業にも取り入れたいと思いました」

特集

芸術という高みを目指して

独立展 入選「Romantico」

教育学部生涯教育課程
芸術文化コース（美術）4年
稲田（いなだ） 友加里（ゆかり）さん

独立展 入選「海の時間」

教育学部生涯教育課程
芸術文化コース（美術）4年
三浦（みうら） 夏実（なつみ）さん

伸び盛りのいまこそ自分を磨け！

大好きな絵を学び、作品を創作する学生たち。しかし、教育学部で絵を学ぶ学生ならではの苦労があります。芸術系の大学に比べて、学ばなければならない教科が多く、制作に専念というわけにはいきません。3、4年生になると就職活動が始まるうえに、卒業するためには卒業制作と論文が課せられます。学生たちの頑張りには本当に頭が下がる、と土井原先生は感心します。

「それでも、学生たちにはどんどん制作してほしいし、さまざまな機会に作品を発表し、コンクールにもチャレンジしてほしいんです。学生の間に、何か形に残る成果、業績を挙げられるよう応援したい」

このような先生の思いが伝わったのか、平成25年には4年生の稲田友加里さんと三浦夏実さんが、全国規模の公募展である「独立展」に入選。教育学系の大学生の入選は快挙だそうです。卒業生には何人か、作家として活動している人もいます。また、卒業後、美術とは違う分野の仕事に就いたとしても、学生時代に果敢に作品に向き合ってきた経験は活きてくるものだといいます。

「17歳から23、24歳ごろというのが、一番成長する時期なんです。だからこそ、いま頑張ってほしい。自分の技術を磨き、さまざまなジャンルの優れた作品を見ることなどで情報を得て、名著にも触れて精神性を高める。制作と情報と思考の3つがリンクするような学生生活を送ってほしいと思います」

芸術と向き合うことで、日々、成長する学生たち。その可能性は大きく広がっています。

土佐湾ほど豊かな海はない！

「海に強い大学」として知られる高知大学。その中核施設、海洋生物研究教育施設から出航、調査のフィールドを巡りながら、土佐湾を研究する意義を聞きました。

日本近海でも格別、生物の多い土佐湾が研究のフィールド

海洋生物研究教育施設から徒歩2分。浦ノ内湾にある港から実習船「豊旗丸」19トンに乗り込みます。

「水温や塩分、流向流速などを測定する最新の海洋観測機器や、こんないい船を持っている大学はめったにないんですよ」

土佐湾や汽水域のコアマモ場でアユやアカメ、イワシなどの主に稚魚を採集し、その生態を研究している木下泉教授が話します。甲殻類、ウミガメなどが専門の斉藤知己准教授と一緒に、今日は海洋生物研究教育施設近くの海を案内してくれるのです。宇佐大橋をくぐり、リアス式海岸の横浪半島に沿って豊旗丸は快調に走ります。紺碧の洋上で、まずは木下先生の特別講義がスタートしました。

「日本近海は海洋生物量の多さでは世界屈指です。栄養塩豊かな親潮と、栄養はないけれどもダイナミックな動きと高い水温を持つ黒潮がぶつかるのが大きな理由でしょう。そうした日本近海のなかでも、格別に豊かな海が土佐湾なんです」

高知は確かに魚のおいしい土地ですが、目の前の海が「日本で群を抜いている」と聞くと、ちょっと驚いてしまいます。木下先生は施設のある土佐市宇佐の名産、ウルメなどのイワシ類の研究成果を具体例に説明してくれました。

「じつはウルメイワシは土佐湾を中心にしか卵を産まないんです。近い仲間であるマイワシもそう。マイワシは1980年代、日本の漁獲量の半分を占めていましたが、その後激減し、日本近海のほとんどの場所で卵を産まなくなりました。現在唯一残っているマイワシの産卵場が、この土佐湾とその周辺なんです」

イワシたちにとって、土佐湾は繁殖に欠かせないかけがえのない海。ほかに海はいくらでもあるのに本当に不思議です。

「イワシ類だけではありません。ニタリクジラが日本近海でこどもを産むのも土佐湾だけです。土佐湾はものすごい量の海洋生物の再生産を担っています。その謎を解ければ、資源管理の方法なども見えてくるはず。それが高知大学の、とりわけ私の研究の最も大きなテーマの一つです」

豊かな海の秘密は深層水にあり

土佐湾はなぜ豊穣の海なのか。山から川が運んでくる栄養分が重要だといわれることがありますが、「それよりもずっと大事なのは深層水」と木下先生は考えています。深層水に含まれる栄養塩の量は、川の水と比べると2ケタも多いそうです。

「足摺岬沖には渓谷のように一気に深くなる四万十海底谷という場所があります。海底谷の深い部分を深層水が通っていますが、その上を黒潮が流れている時には、頭を押さえつけられて湧き上がることができません。しかし、黒潮の流れはよく変わります。黒潮が足摺海底谷の上から離れた時、深層水はバネが弾むように一気に湧き上がる。その現象が頻繁に起こることが土佐湾を豊かな海にしている、というのが私の立てた説です」

北極で氷が溶けたのち、百数十年以上かけて世界の深海を巡る深層水。それが土佐湾を豊かにしているというのですから、ロマンあふれる話です。

土佐湾の浜では年に300回近くもウミガメが産卵

豊旗丸は池ノ浦沖で方向転換。今度は東に向かって土佐湾を走ります。仁淀川河口が見えてくると、特別講義はウミガメが専門の斉藤先生にバトンタッチ。じつは、仁淀川河口周辺の浜はアカウミガメの重要な産卵場所なのです。

「高知でウミガメが産卵しているというのは、意外にも全国的には知られていないんです。私の研究室では平成25年から調査を始めました。仁淀川河口付近の東西3.7㎞では昨年、アカウミガメが85回上陸、51回産卵し、当施設の近くでこんなに産卵があることが分かって驚いています。まだ高知県の全貌は把握していませんが、調査できないような小さなポケットビーチも含めると、おそらく土佐湾内でも毎年300回を超える産卵があるのではないでしょうか」

ウミガメの産卵といえば、四国では徳島が有名ですが、いまは県全体で年に100回もないとのこと。高知の過去の記録は分かりませんが両県とも産卵数は激減しているものと思われます。しかし、それでも土佐湾は今だにウミガメを育む海でもあるのです。ウミガメの調査は地元の団体「春野の自然を守る会」と斉藤先生が率いる、通称「甲らモノ研究室」の学生も熱心に取り組んでいます。理学部4年生の和田真央子さんが調査の仕方を話してくれました。

「5月初旬から8月中旬まで、ほとんど毎日、日の出とともに浜を歩いて痕跡調査をして産卵の実態を明らかにしました。また、仁淀川河口は砂浜の奥行が短く自然な状態での孵化が見込めないため、足跡を見つけて産卵を確認したら、卵を掘り起こして、近くにある孵化場に移しています」

卒業したら大学院に進み、将来は自然や環境に関する仕事に就きたいと和田さん。愛媛出身ですが、木下先生や斉藤先生のように、高知の海が大好きになったようです。木下先生は土佐湾を見渡して感慨深げに語ります。

「私は研究者として土佐湾に育てられました。土佐湾に感謝です。ここは本当に素晴らしい海ですよ。謎をもっと解明すれば、生物の生態の仕組みがかなりわかると思います。でも、私の代では時間が足りない。だから、いつも学生に言ってるんです、せっかく高知大に来たんだから、あなたたちが明らかにしてほしいと」

海洋生物研究教育施設では、今後も教員と学生が一丸となって、世界に誇る豊穣の海、土佐湾の研究を続けます。

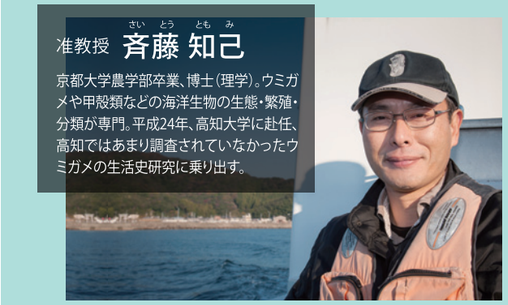
高知大学総合研究センター「海洋生物研究教育施設」とは？

昭和53年に全国で初めて、理学部附属臨海実験所と農学部附属水産実験所が統合されて発足。土佐市宇佐にあり、浦ノ内湾に面する。研究・実習施設、飼育施設、船舶の充実ぶりは全国の大学でも屈指。現在、4名の教員が魚類・プランクトン・海藻・ウミガメなどの研究を行っている。

理学部理学科４年和田真央子さん

教授 木下（きのした） 泉（いずみ）

長崎大学大学院修了、農学博士。魚類初期生活史、水産生物学が専門。県内でアカメやアユなどを研究テーマとし、「いっぱしの研究者になれたのは土佐湾のおかげ」。世界のアカメ科魚類、有明海の魚、バイカル湖なども研究。



准教授 斉藤（さいとう） 知己（ともみ）

京都大学農学部卒業、博士（理学）。ウミガメや甲殻類などの海洋生物の生態・繁殖・分類が専門。平成24年、高知大学に赴任、高知ではあまり調査されていなかったウミガメの生活史研究に乗り出す。

和田さんが観察しているウミガメ

海図を基に説明してくださる木下先生

海洋生物研究教育施設

キラ星高知大生

学内外でキラッと光る
高知大生をピックアップ!

環境に負けず、続けて良かった! 第68回国体・弓道成年女子遠的団体で優勝!

支えてくれた人に恩返しができました

昨年の第68回国民体育大会「スポーツ祭東京2013」。弓道の成年女子遠的で優勝を果たした高知県成年女子チームの一員として、農学部1年の西森空さんは出場しました。「決して調子は良くなかったのですが、チームのメンバーに引っ張ってもらったおかげで優勝できました。支えてくれた人に恩返しができたと思います」と試合を振り返ります。

高知大学弓道部の弓道場は朝倉キャンパスにあります。西森さんは2年生になると物部キャンパスに通うことになるので、弓道部への入部は断念。個人で弓道場に通い、弓を引く日々を続けました。

「高校の部活動では先生に指導してもらえたので、ひとりで練習するのは大変でした。当たらない時にどこが悪いのか、どう直せばいいのか手探りの状態でした」

ただ、週末は国体の強化選手が集まって練習するので、メンバーからアドバイスを受けることができたと言います。夏休みには強化合宿にも参加して国体を目指し、今回の優勝へとつながりました。

「弓道を続けるか迷った時もありましたが、やっていて良かった。これからも続けていきたいと思います」

農学部1年
西森 空(にしもり そら)さん

高知県出身。高校時代から弓道を始め、高校3年生の時には少年の部で国体に出場し、優勝。「高校の先生から、『いいことをして神様を味方につけたら、的をはずれた矢でもあたる』と言われました。それからなるべく、いいことをしています。ゴミが落ちていたら拾ったりとか…(笑)」

大学での経験をふるさとで活かす日のために

地域経済を勉強し政治家になるのが目標です

高知大学を選んだ理由のひとつは、モンゴル人留学生がほかにいなかったこと。ひとりのほうが、いろいろ挑戦できるのではないかと思ったのです。年に数回、日本に留学している同郷人と集まるのですが、ちょっと僕のほうが成長しているように感じます(笑)。

大学では地域経済を勉強しています。僕の目標は政治家になることです。だから、市民社会や財政、公共経済などを論理的に学びたいと思っています。

高知大に来て良かったと思うのは、いろいろな人に出会えたこと。1年生の時から、地域や留学生の交流を目的にした「国際茶屋」というサークルに入って活動しています。田舎の運動会に参加したり、発展途上国支援の取り組みなどをしています。地域活性化や限界集落のことは、高知大学に入ってから知りました。モンゴルも過疎などの同じような問題を抱えているので、高知大で学んでいることは卒業後、帰国してからきっと役立つと思います。

人文学部 社会経済学科3年
ブヤンネメフ テルメン さん(モンゴル)

モンゴル・ウランバートル出身。ヒッチハイクで高知から仙台まで行った経験を持つ。大学の男子寮である南溟寮での生活も、もうすぐ丸3年。「高知に来て最初の日、南溟寮の場所がわからず迷ってしまい、初日から大変でした」

(上)高知大学の国際交流パーティで馬頭琴を演奏

(左)モンゴルでのボランティア活動の様子

PICK UP LECTURE
まなびの時間
高知大学の講義・研究

地域に出る! 人と話す! それが地理学の第一歩

人文学部 人間文化学科
地域変動論コース 人文地理学

地図化するから見えてくるものがある

高校で勉強する「地理」といえば、国の名前や川の名前を覚えるといった、いわば暗記科目のひとつという印象を、多くの人が持っているのではないでしょうか。しかし、「大学で学ぶ地理学は全く別物」と、人文学部で人文地理学を教える後藤拓也先生は言い切ります。

「地理学には自然地理学と人文地理学があります。自然地理学は地形や気候などの自然現象が対象で、私がやっている人文地理学は主に人間と地域の関係がテーマになります。いずれも現地に出かけて地域を調べ、データを集めて分析するもので、フィールドワークが欠かせません」。高知県の過疎問題などは人文地理学のオーソドックスなテーマ。どういうところで人が減っているのかを調べ、その分布を地図化して、問題を分析するそうです。

「地図化こそが、地理学の一番の特徴です。たとえば過疎問題で取り上げられる限界集落(※)は、高知県の中山間地域のあらゆるところにあるというイメージを持たれがちですが、地図化すると、じつは特定の場所に偏っていることがわかるのです。地図に落とし込むことで、問題を可視化、“見える化”できるんです」。

※限界集落
過疎化などで人口の50%以上が65歳以上の高齢者になり、社会的共同生活の維持が困難になっている集落。社会学者・大野晃さんが高知大学人文学部教授時代の平成3年に、最初に提唱した概念。

後藤先生の著書

先生に聞きました!

PROFILE

教育研究部 人文社会科学系
人文社会科学部門 准教授
後藤 拓也(ごとう たくや)

広島大学教育学部卒業、広島大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。平成20年、高知大学に着任。「高知は南国なのに、冬は意外と寒いのに驚きました。でも人は温かいし、食べ物もおいしいですね」

後藤 拓也 准教授

読み解く力を身につける

地図化するためには、もとになるデータが必要です。現代はインターネットなどで多くの情報を手に入れることができますが、「現地に行かなければ手に入らないようなデータこそが貴重」と後藤先生。そこで現地調査、フィールドワークが必要になります。ゼミで学ぶ学生にとっては、フィールドワークこそが学ぶきっかけになっています。現地調査の方法を学ぶために、学生は3年次、「地域調査実習」の授業を受けます。

「高知県内で調査地を決め、合宿して聞き取り調査の練習を行います。雰囲気に慣れ、人とのコミュニケーションの仕方やメモの取り方を練習します。卒論に取り組むための予行演習です」。

4年生で取り組む卒論は、学生がそれぞれ研究テーマを決めて、現地調査を行います。高知県内か出身地がフィールドワークの対象。テーマもさまざまで、観光や歌謡曲をテーマに取り上げる学生もいたそうです。「大切なのは、集めたデータをどう読み解くのかということ。いろいろな出来事に対してどのようなものの見方をするのかということにつながります。卒論を通して学ぶこのような思考は、社会に出てからも役に立つのではないでしょうか」。

高知大学ニュース

"ふれあい"と"絆"をテーマに開催 第4回ホームカミングデー

キーワードはふれあいと絆

11月9日、同窓会連合会と共催し、第4回ホームカミングデーを開催しました。今回は"ふれあい""絆"をキーワードに、午前は各学部が企画したイベントを各キャンパスで実施、午後は記念式典、記念講演及び懇親会を朝倉キャンパスで開催しました。

記念講演には、映画「月の下まで」の監督・奥村盛人氏(人文学部卒業)を講師に迎え、「ドキュメンタリーとフィクションを歩く～記者と監督 表現への挑戦～」と題して、高知大学での思い出や、新聞記者から映画監督へ転身されるまでを講演していただきました。当時の指導教員だった教授が学生時代の奥村氏のエピソードを披露し、会場は笑い声とともに和やかな雰囲気に包まれました。

キャンパスでは、卒業生に懐かしい一日を楽しんでいただくため、学生によるキャンパスツアー、お茶会、よさこい鳴子踊り、学生ボランティアの活動紹介等も行われ、好評でした。

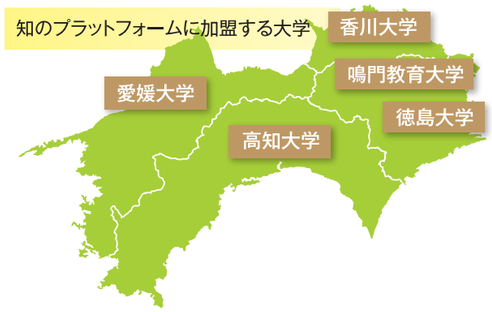
また、ホームカミングデーに合わせて図書館では、学徒出陣し無実の罪で1946年に死刑となった木村久夫氏(高知大の前身である、旧制高知高校を1942年に卒業)の獄中の手記が収録された「きけわだつみのこえ」ほか、蔵書を中心に特別展示も行われました。

四国5大学連携による知のプラットフォーム形成事業 シンポジウムを開催

四国5国立大学(徳島大、鳴門教育大、香川大、愛媛大、高知大)が連携して入試、大学教育、産学連携に関する事業を実施し、大学の枠を越えて大学改革を推進するという取組み「四国5大学連携による知のプラットフォーム形成事業」の一環として、10月4日シンポジウムを開催しました。

「海洋資源の有効活用と四国5大学連携海洋系教育プログラムの構築」をテーマに、高知大学がこれまで実施してきた海洋に関する最先端の研究成果を発表。またゲストスピーカーに海洋政策研究財団海洋グループ古川恵太研究員を迎え、ご自身が携わった日本各地での地域活性化事例の紹介や、海洋立国を支える人材の育成が急務であることなどの説明がされました。

今後もプラットフォーム形成事業へ、5大学が積極的に協力し取り組んでいきます。



第53回 室戸貫歩開催

体力と精神力の限界に挑戦する、90キロの道のり

今ではすっかり恒例行事となった室戸貫歩を11月30日・12月1日に開催しました。

朝倉キャンパスから室戸岬までの約90キロを制限時間30時間以内でゴールすることをめざして夜通し歩く室戸貫歩は、昭和36年に空手道部が心身の鍛錬を目的に体力と精神力の限界に挑戦したことから始まったもの。今回は天気にも恵まれ524名が参加、291名が貫歩しました。

沿道でのあたたかい声援や、豚汁、おでん、おにぎりなどのサービスを地元の方にご提供いただくなど、室戸貫歩は多くの方のご支援・ご協力により実施されています。

第4回こどもサッカー教室を開催

サッカーを通じて地域貢献

11月30日、高知銀行との共同主催で「第4回こどもサッカー教室」を高知県立春野総合運動公園球技場で開催しました。高知大学サッカー部は、20年連続29回目の全日本大学サッカー選手権大会への出場も果たし、またプロサッカー選手も輩出する強豪チーム。その部員が指導するサッカー教室とあって、今回も2歳児から小学校高学年まで250人の募集枠がすぐに一杯になった人気のイベントです。サッカーを通した子ども達とのふれあい、指導で地域への貢献をめざします。

園児が勤労感謝の日に学長を訪問

心温まる手作りカレンダー

11月22日、勤労感謝の日を前に、近隣の保育園児30人が学長を訪問しました。整列した園児が「お仕事ご苦労様です。いつも散歩させてくれて有難う」と大きな声で挨拶。手作りのカレンダーなどを学長にプレゼントしました。

受賞者紹介

大学院医科学専攻2年
竹﨑 由佳さん
第31回日本ヒト細胞学会学術集会
「ヤングサイエンティスト賞」を受賞

医学部医学科4年　医学部医学科5年
金子 洋平さん・近藤 彩奈さん
第75回日本臨床外科学会総会
「医学生Award」を受賞

臨床医学部門
竹内 啓晃講師
第60回日本臨床検査医学会学術集会
「学術賞(Scientific Award)」を受賞

大学院農学専攻2年
石川 英利佳さん
平成25年度日本水産学会
中国・四国支部例会「優秀発表賞」を受賞

黒潮圏科学部門
木下 泉教授
公益財団法人河川財団 河川整備基金
助成事業研究成果表彰「理事長賞」を受賞

大学院農学専攻1年
渡辺 靖崇さん
森林利用学会第20回学術研究発表会
「学生優秀論文発表賞」を受賞

第37回中国四国学生陸上競技選手権大会「優勝」
【男子800m】
寺田 勇気さん(人文学部・2年)
【女子円盤投げ】
池田 綾子さん(教育学部・4年)
【女子やり投げ】【女子7種競技】
堀之内 舞さん(教育学部・2年)

子どもの健康と環境に関する全国調査
こうちエコチル調査
エコチル調査の参加者6,000人以上!

こうちエコチル調査キャラクターちょるるん

平成23年1月より開始しました環境省の「子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)」、高知大学は四国で唯一の拠点として妊婦さんの参加を募ってきました。おかげさまで参加者は6,000人以上、2月11日(火)には、テツandトモ、スーパーバンド等を招き、かるぽーとにて3周年記念イベントを開催します。エコチル調査への参加募集は3月まで。全国で10万人、高知で7,000人の参加が目標です。詳細は下記HPへ。

高知ユニットセンターHP▶http://kochi-ecochil.jp/

トランペットでエスポアール賞

第14回大阪国際音楽コンクールにて、山﨑さんが金管楽器部門でエスポアール賞に入賞しました。「高知という土地は、都会と比べるとプロの音楽に触れる機会が少なく、また施設面での環境は圧倒的な差があります。しかし高知大学には、優れた、熱心な教員(指導員)が多く在籍、学生と教員との距離も近く、より密で丁寧な指導が受けられます。高知にいても、自分次第で成長できる。得られるチャンスは見逃さず積極的に追求し続けることが大事」と山﨑さん。

夢は、教員になり音楽の指導者になること。「自分が経験したことを、子どもたちに伝えたい。だから、チャンスがあれば挑戦します」と、夢実現のため、日々の努力を惜しみません。

大学院教育学専攻2年 **山﨑 千穂里さん**

- ●平成20年「第50回全四国音楽コンクール」金管楽器部門 大学生・一般の部 2位
- ●平成23年「第21回日本クラシック音楽コンクール全国大会」金管楽器部門 大学女子の部 3位(1,2位該当なし)
- ●平成25年「第14回大阪国際音楽コンクール」金管楽器部門 エスポアール賞(1～3位に次ぐ賞)(1,2位の該当なし)

秋の叙勲高知大学から2名受章

瑞宝重光章(教育研究功労)
元高知大学長・高知大学名誉教授
山本 晋平氏(やまもと しんぺい)

瑞宝中綬章(教育研究功労)
高知大学名誉教授
堀川 幸也氏(ほりかわ ゆきや)